

■ワークショップ 4■

active に広げる対話空間—零からせせらぎへ—

キーワード：少人数対話、放課後

開成高等学校 2 年有志 小林大輝・高野朋己・副島裕太郎

<タイムテーブル案>

1. 会場全体で問い出し。特にテーマは設けないつもり (15 分)
2. 任意の 4 人でグループを作り、それぞれの中で問いについて対話。(15 分)
3. 近くにいる 2 つのグループの 4+4=8 人で 1 つの円になる(このとき、それぞれの 8 人グループに 1 人のファシリテーターが付きます)。まず、双方が簡単にそれまでの対話内容を共有 (5 分)
4. 改めて、問いについて 8 人で対話 (20 分)
5. 8 人の中から、全体に提案したい問いを募る。ファシリテーターは記録しておく (5 分)
6. もう一度参加者全員でひとつの輪になる。先ほどのグループのファシリテーターが簡単に対話内容をフィードバック。各グループから提案された問いを全体に共有し、投票で一つに絞る。(5 分)
7. 全体で対話(時間まで)

*やや時間に余裕がないのが心配されるが…。

<ファシリテーター>

高野朋己・副島裕太郎・小林大輝 (開成高等学校 高 2)

<意図・アイデア>

- 実験的な企画。「学校の放課後の時間は短いけれど、対話に参加したい人は多い」という状況を、逆手にとってなんとか面白いものにできないか……という思いを出発点にしています。急がないことと、active な対話は両立するのか、試してみたいと思います。
- 一般的な対話で必ずと言っていいほどみられる「問いの移り変わり」を対話の中で明確化してみよう、という意図もあります。
- 同じところから全員で出発して、2 回の対話を経てどこまで変化して戻ってくるかの変化を観察できるのか、という期待もしています。(人数上の都合で小グループに分けて対話をするという形式は割と一般的だと思いますが、敢えて規模の違うグループで 2 回対話をしてから全体に戻るというのは新鮮なのではないかということです)
- 高校生が大人(もいるグループ)の対話の進行をするということが起こると見えてくるものが双方にあるかもしれないですね。

(こばやし・ひろき、たかの・ともき、そえじま・ゆうたろう)

いつしか仲良くなった同学年の 3 人。「高一の時に学校で哲学対話をして以来、哲学に興味を持ちました。潤っているものが好きです。」(副島)、「体育会系兼文学少年、アメリカ (3 週間) 帰りの長身細身メガネ風好青年的生徒会長、男子校歴 5 年の高校 2 年生。」(高野)、「鞆にいつもコミュニティボールを入れてる系高校生です」(小林)